

城ヶ島 (六卷)

脚色並監督者 帝キネ芦屋映畫
撮影者 伊藤大輔氏
大森勝氏

主要役割

仁吉 高堂國典氏
亮吉 里見明氏
お英 歌川八重子嬢
お力 鈴木信子嬢
周三 若井信男氏

〔略筋〕三浦岬から田舎町を通ふ馬車屋を渡世にして居る仁吉は自働車の爲めその生活は日に困窮に陥つて来た。それに彼は眼病さへ患つて居たが生活を支へる爲め老の身で毎日馬を馱さなければならなかつた。或る日この村へ一人の青年紳士が訪れた。そうして殊更ら自働車に乗らずに故郷に歸る途中で鞆の中には莫大な金が入つて居る事など仁吉に物語つた。借財に苦しんで居た仁吉はその瞬間前後の夢へもなく突然紳士を断崖から突落して鞆を奪つた。若紳士は實は仁吉の伴亮吉であつた。彼は數年前酌爺お力と東京へ走つたのであつた。亮吉は偶然崖下を通り會はせたお英と周三に救はれた。お英は兄なる事を知つた。けれど既に死が追つて居た亮吉は父を罪人にするに忍びず父の

犯行を秘し自ら誤つて断崖から墜落したと物語り儲けた金を父に渡して呉れと云つた。そうして彼はお英に故郷に在りし頃得意に唄つた「城ヶ島」の唄を歌つてくれと頼んだ。お英が涙ながらに歌ふ「城ヶ島」の哀歌は彼が死の断末魔の魂を微笑せしめるのであつた。

小唄映畫の餘波を受けて製作された映畫で北原白秋氏の有名な「城ヶ島」の唄を取り入れた譯りである。そして松竹蒲田に先だち素早く完成した帝キネ得意の速製作品である。然し伊藤大輔氏の脚色並監督は氏の得意のセンサメンタリズムを全篇に漲らせて居て観客を充分涙ぐませて居る。この映畫にはふさばしい監督者と云ふべしである。然し前半は筋の運びが鈍い爲め冗漫の難は免れない。が後半に於てその難を取返して居た感である。譯り中何處やら「幸福の谷」や「暮れ行く驛路」を想ひ出さしめる場面があつた。俳優では高堂國典氏の仁吉が傑出して居る。相變らず巧みな扮装としっかりした演技で痛々しい世の敗慘者たる仁吉を見事に演出して居る。賞讃すべき價値あると思ふ小唄ものとしては芦屋の「籠の鳥」東亞の「戀慕小唄」に次ぐ佳作であらう。

(拾壹月六日、大阪芦屋劇場封切)
山本 綠葉



城ヶ島 (六卷)
帝キネ芦屋映畫